

2025 年 7 月 13 日 市川福音キリスト教会（詩篇 18 篇 1～3 節）

パウロの生きざま

I コリント 4 章 14～21 節

はじめに

先週は 6～13 節を学び、聖餐に与りました。白石剛史先生の「パンとぶどう酒はキリストに接続するアイコン」という教えの通り、パンとぶどう酒に何かの力があるのではなく、キリストのいのちに接続することの大切さを学びました。そして、誤解されたり軽んじられたりした使徒たちの境遇を学びました。パウロの「ののしられては祝福し、迫害されては耐え忍び、中傷されては、優しいことばをかけ」という生き方は、キリストに倣う生き方でした。キリストのパンと杯に与る私たちも、そのようなキリストの生き方に接続されましょう、ということで一週間の歩みに遣わされました。皆さんはいかがでしたか？

1、 あなた方を生んだ父として（14～15 節）

14 節「私がこれらのことを書くのは、あなたがたに恥ずかしい思いをさせるためではなく、私の愛する子どもとして論するためです。」

そうとう手厳しいことを書いて来たパウロが、その気持ちを打ち明けると、それは親心からでした。それはそうですね。彼が生み出した教会なのですから、仲間割れがあり、教会のいのちに関わる過ちに陥っているとあらば、言葉使いも厳しくもなります。「兄弟たち」と繰り返し、語りかけてきたパウロですが、ここではそれを越えて、「私の愛する子ども」たちと語りかけます。

15 節「たとえあなたがたにキリストにある養育係が一万人もいる、父親が大勢いるわけではありません。この私が、福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。」

父母に代わって子供の世話をし、子供をしつけ、子供を養育する係りの奴隷が養育係です。時には親と過ごす時間より多くの時間を過ごすので、親よりも養育係に子供が懐くこともあるでしょう。しかし、父親は父親、ひとりしかいません。ここで養育係がコリントの教会において誰を指しているのかは、あまり重要ではないでしょう。パウロが「あなた方を生んだ」父親なのだ、というところが大切です。

シラスやテモテの働きがあり、後継者としてのアポロの働きもありますが、パウロの働きによってコリントの教会が生まれたことは間違いありません。

そして、ここでもパウロの言い方は丁寧で正確です。「この私が、福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだ」と言っていますね。彼の発案とか技量とかではないのです。「福音」がコリントの教会を生み出したのです。イエス・キリストが聖霊によってコリントの教会を生み出したのです。パウロは自分の功績を誇るためにではなく、コリントの教会の生みの親としての親心を言い表しているのです。

2、 私に倣う者となってください (16～17 節)

16 節「ですから、あなたがたに勧めます。私に倣う者となってください。」なかなか言える言葉ではありませんが、「私が生んだ」、私が父親であるという意識がこう言わせていることがわかると、腑に落ちます。

「倣う者となってください」というところは、ミメーテースという言葉が使われています。英語で謄写版は **mimeograph** と言いますが、その語源です。パウロはコリントの人たちに私のような人になって欲しいと言いました。今ではミメーテースの技術が進歩して、コピー機があり、3D コピーがあり、クローンまであって、「倣う者」どころか「同じ者」ができそうで、ちょっと怖かったりしますが、そういう気持ち悪い話ではありません。クローン人間になれば、と言っているのではなく、それぞれが別の人格、別の感性と性格を持ちながら、福音に生きる生き方が似ている、キリスト・イエスにあっての生き方が似ている、と言われる人になってください、と言うのです。

17 節「そのために、私はあなたがたのところにテモテを送りました。テモテは、私が愛する、主にあって忠実な子です。彼は、あらゆるところのあらゆる教会で私が教えているとおりに、キリスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう。」

パウロは、コリントの教会の兄弟姉妹を、愛する子どもとして諭すために、もう手を打っていました。テモテをコリントに送り出したのです。この時代の手紙の書き方として、これからテモテを送るとしても、たとえばテモテが手紙を持って行くような場合にも「テモテを送りました」という書き方をします。しかし、コリント人への第一の手紙は共同執筆者がソステネだけで、テモテの名前はありませんから、おそらくテモテはすでに出発していました。

「テモテは、私が愛する、主にあって忠実な子です」。そうです。テモテこそ、パウロにミメーテースされた、パウロに似た者なのです。コリントの信徒たちに、このようになって欲しいという見本のようなテモテを、パウロは自分の代わりに送ったのです。

パウロもテモテも、コリントの教会を問題視して、コリントの教会だけに、このようなことを言っているのではありません。「彼（テモテ）は、あらゆるところのあらゆる教会で私が教えているとおりに、キリスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう」と言っているように、パウロに倣う生き方は、福音によって、キリスト・イエスにあって生きる生き方のユニバーサルデザインなのです。

「生き方」という訳された言葉を直訳すると「道」です。日本では「柔道」「空手道」「茶道」「華道」、どれにも「道」がついて単なる技術ではなく、「生き方」を表します。PUFFYの「これが私の生きる道」は、歩く経路の道ではなく「生き方」のことです。大谷君はベースボールの本拠地で野球道のような生き方をしています。

テモテは「キリスト・イエスにある私の生き方」をコリントの信徒たちに思い起こさせてくれるでしょう」、とパウロは期待します。パウロ道とかキリスト道とは言いませんが、キリスト教の信仰は単なる知識や神の子とされる身分だけでなく、生き方なのです。永遠の命とは、キリストにより永遠の滅びをまぬがれるだけでなく、キリストのような生き方をすることなのです。

福音を宣べ伝えることを「宣教」と言います。「布教」と書けば教えを布くことですが、「伝道」とは生き方を伝えることです。よい言葉だと思います。私たちは「私に倣う者となってください」という思いで伝道したいものです。

3、 思い上がるな（18～21 節）

18 節「あなたがたのところに私が行くことはないだろうと考えて、思い上がっている人たちがいます。」

どうしてそんなことが分るのだろうかと思いますが、パウロの洞察力をもってすれば、そうに違いないと判断できたのでしょう。

「思い上がる」という言葉を、このあたりでパウロは頻繁に使っています。次の 19 節にも、5 章の 2 節にも、そして少し前の 4 章 6 節でも使われています。「思い上がる」「高慢になる」、よく言えば「プライドを持つ」「自信がある」という意味の言葉です。18 節は、日本語としては「あなたがたのところに私が行くことはないだろうと考えて、高を括っている人たちがいます」がよいように思いますが、その本質は「思い上がっている」ということです。

そんな高を括っている人たちの思いを見透かして、パウロは言います。

19 節「しかし、主のみこころであれば、すぐにでもあなたがたのがたのところに行きます。そして、思い上がっている人たちの、ことばではなく力を見せ

てもらいましょう。」

私がすぐに行きますよ。という警告だけでなく、私が行ったなら「思い上がっている人たちの、ことばではなく力を見せてもらいましょう」と、パウロもう一步踏み込みます。

話の流れは 21 節につながります。「あなたがたはどちらを望みますか。私があなたがたのところに、むちを持って行くことですか。それとも、愛をもって柔和な心で行くことですか」

答えは「愛をもって柔和な心で」に決まっていますが、パウロは、いずれにしても両方とも持って行きそうです。彼の言いたいことは、パウロは来ないだろうから、テモテくらいならどうにでもなる、などと高を括っているなよ！ということです。

ところで、ここでパウロは、「ことばではなく力を見せてもらいましょう」という言葉に続けて、私たちも心しておくべき大切なことを語りました。

おわりに 神の国は力にある (20 節)

20 節「神の国は、ことばではなく力にあるのです。」

私たちは「神の国」に生きています。人は罪を悔改めて、イエス・キリストを信じ、神の国に入ります。ここで言う「神の国」は日本の国土のような領域ではありません。神が支配しておられるところ、という意味です。

私たちは、神を神とせず、神をあがめず、思い上がって、ともすると自分が神であるかのように思っています。主イエスはニコデモに言いました。「人は新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません」。そうなのです。人はすべて罪を悔い改めて、神に従う決心をして神の国の民となるのです。この理解は大切です。これは「ことば」です。このように理解することは大事ですが、それだけではないのです。「神の国は、ことばではなく力にあるのです」。

「力」はデュナミスということばで、ダイナマイトの語源です。神の国を言葉で理解することは大切です。しかし、神の国では、ことばの理解だけでなく、神の力が現わされるのです。神に従いますと言うだけでなく、神に従う生き方が大事です。思いあがりませんと言うだけでなく、へりくだる生き方を実際にすることが大切なのです。

パウロが「私に倣う者となってください」という生き方、キリスト者の道がここに 있습니다。これこそが神の国なのです。私たちもことばだけでない神の国を、パウロの生きざまに倣って、キリストのみ足の跡に従って、今週も私たちの道を歩んで参りましょう。